

電 158 電気数学 I

第 11 回

線形空間 (2)

電 158 電気数学 I 2013 年度前学期 琉球大学工学部電気電子工学科 (夜間主コース) 担当: 半場

グラム・シュミットの直交化法 (1) 124~125 ページ

- グラム (Gram) とシュミット (Schmidt) は人名, 定理, 方法等に名前を付ける際, 関係者数名の名前を連ねることは多い
- 1 次独立なベクトルの組から正規直交系を得る手順
- 零でない \mathbf{a} を正規直交「系」(1 個だけでは系ではないが)にするにはノルムを 1 にする, すなわち $\mathbf{v} = \mathbf{a}/|\mathbf{a}|$ とする
- 独立な 2 個のベクトルの組 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ から正規直交系を得るには $\mathbf{v}_1 = \mathbf{a}_1/|\mathbf{a}_1|$, $\mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 - (\mathbf{a}_2, \mathbf{v}_1)\mathbf{v}_1$, $\mathbf{v}_2 = \mathbf{b}_2/|\mathbf{b}_2|$ とする

グラム・シュミットの直交化法 (2) 124~125 ページ

▷ 一般系

準備) 1次独立なベクトルの組 $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が与えられているものとする

ステップ 1) $\mathbf{v}_1 = \mathbf{a}_1/|\mathbf{a}_1|$ により正規化する

ステップ j) $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_{j-1}$ から正規直交系 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{j-1}$ が得られているものとし, $\mathbf{b}_j = \mathbf{a}_j - (\mathbf{a}_j, \mathbf{v}_1)\mathbf{v}_1 - \dots - (\mathbf{a}_j, \mathbf{v}_{j-1})\mathbf{v}_{j-1}$, $\mathbf{v}_j = \mathbf{b}_j/|\mathbf{b}_j|$ とする

グラム・シュミットの直交化法 (3) 124~125 ページ

▷ 一般形の説明

- $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ は有限個だから k 回で計算が終わる
- \mathbf{v}_1 は \mathbf{a}_1 の「1次結合」(定数倍),
 $\mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 - (\mathbf{a}_2, \mathbf{v}_1)\mathbf{v}_1 = \mathbf{a}_2 - (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1/|\mathbf{a}_1|)\mathbf{v}_1/|\mathbf{a}_1|$, $\mathbf{v}_2 = \mathbf{b}_2/|\mathbf{b}_2$
だから, \mathbf{v}_2 は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ の1次結合, 同様に \mathbf{v}_j は $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_j$ の1次結合である
- $\mathbf{b}_j = \mathbf{a}_j - (\mathbf{a}_j, \mathbf{v}_1)\mathbf{v}_1 - \dots - (\mathbf{a}_j, \mathbf{v}_{j-1})\mathbf{v}_{j-1}$ とすると $(\mathbf{b}_j, \mathbf{v}_1) = 0, \dots, (\mathbf{b}_j, \mathbf{v}_{j-1}) = 0$ となる
- $\mathbf{b}_j \neq \mathbf{0}$ となるのは, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_j$ が独立だから, 仮に $\mathbf{b}_j = \mathbf{0}$ とすると $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_j$ の自明でない1次関係式が得られるので不合理
- $\mathbf{v}_j = \mathbf{b}_j/|\mathbf{b}_j|$ としているから $|\mathbf{v}_j| = 1$

グラム・シュミットの直交化法 (4) 124~125 ページ

- \mathbf{a}, \mathbf{x} に対し, $\mathbf{e} = \mathbf{a}/|\mathbf{a}|$ として, $(\mathbf{e}, \mathbf{x})\mathbf{e}$ を \mathbf{x} の \mathbf{a} 方向の正射影あるいは \mathbf{x} を \mathbf{a} に射影してできたベクトルという (9 ページ, 121 ページと定義が変わっているので注意)
- $(\mathbf{e}, \mathbf{x})\mathbf{e} = \frac{(\mathbf{a}, \mathbf{x})}{(\mathbf{a}, \mathbf{a})}\mathbf{a}$ とも書ける
- グラム・シュミットの直交化法によって得られるベクトル $\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_k$ のいくつかの向き (正負) を変えても正規直交系であることは不変
- k はいくつでもよいが, k をベクトル空間の次元より大きくすると 1 次独立なベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が取れない

線形部分空間 (129~130 ページ)

- 線形空間 V の部分集合 W において, どのように $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \in W$ (V ではないので注意) と c_1, c_2 を取っても $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 \in W$ となるとき, W は V の線形部分空間という
- $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k \in W$ であって, W のどのベクトルも $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ の1次結合で表されるとき, これを W の生成系という
- W の1次独立な生成系を W の基底という
- W の基底の個数を W の次元といい, $\dim W$ であらわす
- $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ の線形結合がつくる集合を $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ で生成される線形部分空間という

ベクトルの組の基本変形 (1) (134 ページ)

▷ ベクトルの組の基本変形とは:

- 2個のベクトルの順序の入れ換え
- あるベクトルの (零でない) スカラー倍
- あるベクトルに他のベクトルのスカラー倍を加える

▷ 2個のベクトルの基本変形

- $(\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2)$: $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ を並べたもの
- $(\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2) \begin{pmatrix} c_{11} & c_{12} \\ c_{21} & c_{22} \end{pmatrix} = (c_{11}\mathbf{a}_1 + c_{21}\mathbf{a}_2 \quad c_{12}\mathbf{a}_1 + c_{22}\mathbf{a}_2)$
とする (通常の行列の積と同じ)

ベクトルの組の基本変形 (2) (134 ページ)

▷ 2 個のベクトルの基本変形 (つづき)

$$(\mathbf{a}_2 \ \mathbf{a}_1) = (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2) \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix},$$

$$(c\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2) = (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2) \begin{pmatrix} c & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix},$$

$$(\mathbf{a}_1 \ c\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_2) = (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2) \begin{pmatrix} 1 & c \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

ベクトルの組の基本変形 (3) (134 ページ)

- ベクトルの組の基本変形は基本行列を使って表現できる
- k 個のベクトルの組の基本変形には k 次の基本行列を使う
- 基本行列は正則, その逆行列も基本行列
⇒ ベクトルの組の基本変形は**可逆** (変形を取り消せる)
 $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ から基本変形によって得られるなら
 $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ は $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ から基本変形によって得られる

ベクトルの組の基本変形 (4) (134 ページ)

$\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ と $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が互いに基本変形で移り変わるとき...

I) $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が 1 次独立 $\Leftrightarrow \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が 1 次独立

II) $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が 1 次従属 $\Leftrightarrow \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が 1 次従属

- 「1 次独立」の否定が「1 次従属」
 \Rightarrow I) と II) で言っていることは同じ
- 上記が成り立つ理由をこれから述べる
- $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ を横に並べたものを $(\mathbf{a}_1 \ \cdots \ \mathbf{a}_k)$ と書く

ベクトルの組の基本変形 (5) (134 ページ)

▷ $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が 1 次独立 $\Leftrightarrow \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が 1 次独立となる理由

$(\mathbf{b}_1 \ \cdots \ \mathbf{b}_k) = (\mathbf{a}_1 \ \cdots \ \mathbf{a}_k) P$ (P は基本行列の積 $U_N \cdots U_1$) とする. $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が 1 次独立であるとき, $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が 1 次従属であると仮定して矛盾を導く. $c_1 \mathbf{b}_1 + \cdots + c_k \mathbf{b}_k = \mathbf{0}$ を自明でない 1 次関係式と

すると, $(\mathbf{b}_1 \ \cdots \ \mathbf{b}_k) \begin{pmatrix} c_1 \\ \vdots \\ c_k \end{pmatrix} = \mathbf{0}$; よって $(\mathbf{a}_1 \ \cdots \ \mathbf{a}_k) U \begin{pmatrix} c_1 \\ \vdots \\ c_k \end{pmatrix} = \mathbf{0}$

となるが, U が正則であることから, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ の自明でない 1 次関係式が得られたことになり, 仮定に矛盾する.

ベクトルの組の基本変形 (6) (135 ページ)

$\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が数ベクトル, $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ から基本変形によって得られた数ベクトルとし, $A = \begin{pmatrix} \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_k \end{pmatrix}$, $B = \begin{pmatrix} \mathbf{b}_1 & \cdots & \mathbf{b}_k \end{pmatrix}$ とすると, ある正則行列 P によって $AP = B$ となる

- 理由はさっき述べたことと同じ
- $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ が数ベクトルでないときには $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ をならべたものは教科書の意味での行列にはならないので注意 (教科書には明示されていない)
- $(\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k)P = (\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k)$ と書けばいつでも大丈夫

基底の変形 (1) (135 ページ)

基底にベクトルの組の基本変形を施したものは基底である
(理由) 基本行列は正則だから

基底の変形 (2) (135 ページ)

$\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_l$ が基底であるとする、 $k = l$ であり、
 $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ は $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ から基本変形によって得られる

(理由) $k < l$ と仮定して矛盾を導く. $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ および $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ は基底だから、 $(\mathbf{b}_1 \ \cdots \ \mathbf{b}_l) = (\mathbf{a}_1 \ \cdots \ \mathbf{a}_k) P$ となる (k, l) 行列 P がある. P の階数は最大でも k で、 $k < l$ だから、 $P\mathbf{x} = \mathbf{0}$ は自明でない解を持つ. このとき、 $(\mathbf{b}_1 \ \cdots \ \mathbf{b}_l) \mathbf{x} = \mathbf{0}$ となり、 $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ が 1 次独立であることに矛盾. したがって $k \geq l$ でなければならない. 同様にして $k \leq l$ がいえるから、 $k = l$. また、 P が正則でないとは仮定すると $P\mathbf{x} = \mathbf{0}$ は自明でない解を持ち矛盾、よって P は正則だから、基本行列の積である. したがって $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k$ は $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$ から基本変形によって得られる.

次元の判定 (1) (135 ページ)

- 行列 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{m1} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \boldsymbol{\alpha}_1 \\ \vdots \\ \boldsymbol{\alpha}_m \end{pmatrix}$

行ベクトルが並んだものと解釈

⇒ 行基本変形は行ベクトルに対する基本変形

- ベクトルの組の基本変形, 基底の変形に関する授業中の議論「列ベクトルを並べて行列をつくる」という部分以外はすべて成り立つ

次元の判定 (2) (135 ページ)

- A の行ベクトルを $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ とする
- 掃き出しによって A が次の形になったとする (空白は零)

$$\begin{array}{l} 1) \\ \vdots \\ r) \end{array} \left(\begin{array}{cccccc} 1 \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ & & & 1 \cdots & \cdots & \cdots \\ & & & & & 1 \cdots \end{array} \right) \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \text{この行ベクトルを}$$

$\beta_1, \dots, \beta_r, \mathbf{0}, \dots, \mathbf{0}$ とする

次元の判定 (3) (135 ページ)

- $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が生成する部分空間と $\beta_1, \dots, \beta_r, \mathbf{0}, \dots, \mathbf{0}$ が生成する部分空間は一致する

- β_1, \dots, β_r は1次独立:
$$\begin{matrix} 1) & \left(\begin{array}{cccccc} 1 & \dots & \dots & \dots & \dots & \dots \\ \vdots & & & & & \\ r) & & & & 1 & \dots & \dots & \dots \\ & & & & & & & 1 & \dots \end{array} \right) \end{matrix}$$

- よって, $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が生成する部分空間の次元は r , 階数は行基本変形の手順によらずに定まる

次元の判定 (4) (135 ページ)

- 列ベクトルについても同じことがいえる

- 行列 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{m1} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix} = (\mathbf{a}_1 \cdots \mathbf{a}_n)$

列ベクトルが並んだものと解釈

- W を $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ が生成する部分空間とすると $\dim W$ は A の階数と一致し, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ の中で 1 次独立なものの最大個数とも一致する

次元の判定 (5) (135 ページ)

▷ 理由:列ベクトルの張る空間の次元と行列の階数の一致 (1)

- A が行基本系列の系列 L によって次の形になったものとする (空白部分は零)

$$\begin{array}{l} 1) \\ \vdots \\ r) \end{array} \left(\begin{array}{cccc} 1 & \cdots & \cdots & \\ & & 1 & \cdots \cdots \\ & & & 1 & \cdots \\ \hline & & & & \end{array} \right)$$

次元の判定 (6) (135 ページ)

▷ 理由:列ベクトルの張る空間の次元と行列の階数の一致 (2)

- 列基本変形 (列の入れ換え) の系列 R_1 によって 1 を対角線上させる

$$\begin{array}{l} 1) \\ \vdots \\ r) \end{array} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & & \cdots & & \cdots & \\ & \ddots & & & & \\ & & 1 & & \cdots & \\ \hline & & & & & \end{array} \right)$$

次元の判定 (7) (135 ページ)

▷ 理由:列ベクトルの張る空間の次元と行列の階数の一致 (3)

- 列基本系列の系列 R_2 (列に他の列の定数倍を加算) により対角線上の要素以外を零にする

$$\begin{array}{l} 1) \\ \vdots \\ r) \end{array} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & & & & & \\ & \ddots & & & & \\ & & & & & \\ & & & 1 & & \\ \hline & & & & & \\ & & & & & \\ & & & & & \end{array} \right)$$

次元の判定 (8) (135 ページ)

▷ 理由:列ベクトルの張る空間の次元と行列の階数の一致 (4)

$R = R_1 R_2$ とすると $LAR = \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ で, LAR の階数は A と等しい. $AR = L^{-1} \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ だから, A の列ベクトルが生成する部分空間は $L^{-1} \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ の列ベクトルが生成する部分空間と一致する. $L^{-1} \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ には零でない列ベクトルは r 本しかないのだが, これらが 1 次独立であることを見る. $L^{-1} \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} (\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} \mathbf{0} \\ \mathbf{0} \end{pmatrix}$ とすると $LAR(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} (\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} \mathbf{0} \\ \mathbf{0} \end{pmatrix}$, よって $\mathbf{x} = \mathbf{0}$, したがって $L^{-1} \begin{pmatrix} I_r & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ の零でない r 本の列ベクトルは 1 次独立であり, AR , したがって A の列ベクトルが張る空間の次元は r である.

次元の判定 (9) (135 ページ)

▷ 結論

- ベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_l$ の中で k 個までは 1 次独立な組み合わせを選べ, $k + 1$ 個のベクトルをどのように選んでもこれらが 1 次従属になるとき, ベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_l$ が生成する部分ベクトル空間の次元は k
- ベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_l$ が数ベクトルのとき, これらを横にならべて作った行列 $A = \begin{pmatrix} \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_l \end{pmatrix}$ の階数はベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_l$ が生成する部分ベクトル空間の次元と一致する